

然し、それにも拘らず、争議団員二百五十余名の結束は巖の如く、
固く、紛乱にぬる、統制は敵。膽を寒からしめて、堂々たるものか
ある。

不景気、アドレナリンに立って、資本金は多大のストックを握り、工場、
休止は寧ろ彼等、望むところである。斯る時、争議が持久戦となり、
の外なきは必然の形勢なのである。争議団は直ちに四方に分れて、臨時
に出稼ぎを開始し、秋、下石、青木、土岐、津、等、各町村へ、或は
瀬戸、品野、水部等、愛知縣下の各製陶地へ、更に遠くは名古屋
屋、大阪、下関、等、遠征した。組合は職業を紹介し、旅費を
給して之を助けた。争議開始後僅か十日にして、争議団員の五
分の四は覆する。妻子を後に残して、勇ましく遠征した。
残れりものは、行商隊を営み、演説會を開き、出稼者、家族を
慰問し、救済し、ビケウチンガを嚴に、争議は整然として進行した。

争議団の本部は、滝呂公會堂に開かれ、
争議開始以来、今日尚、止まらず本部と守る、幹部は次々入る。

交渉委員

高木憲吾
鈴木定三

水野輝

新島時次郎

柴田修

遠藤因次

松尾清益

長江義幸

吉川柳造

柴田信三

吉川逸三

書記

會計係